

保育士養成課程におけるコロナ禍の施設実習の取り組み (2)

Practice of Childcare Worker Training Curriculum at Welfare Facilities During the COVID-19 pandemic (2)

石田 慎二¹
ISHIDA Shinji

帝塚山大学では、新型コロナウイルス感染症の影響で 2021 年度に予定していた保育実習Ⅰの施設実習は、前年度に引き続き学外でのすべての実習を中止として学内での演習を実施することになった。前年度の学内演習においては受講生へのアンケート調査から学内演習の充実度は非常に高く、学内演習の学びの自己評価が高いことを明らかにしたが、本稿では 2021 年度においても同様の学びを保証できていたかを検証した。その結果、2021 年度においても学内演習の充実度は非常に高く、学内演習の内容を充実させたことで各項目においては前年度よりも学びの自己評価が高いことが明らかになった。

1. はじめに

2021 年度も新型コロナウイルス感染症は、指定保育士養成施設（以下、「養成校」とする。）の保育実習の実施に関して大きな影響を与えた。帝塚山大学（以下、「本学」とする。）では、一部の実習施設から実習の受け入れができないとの連絡があったため、2021 年度に予定していた保育実習Ⅰの施設実習¹⁾は、すべての実習を中止として学内での演習（以下、「学内演習」とする。）を実施することになった²⁾。

本学では、前年の 2020 年度も新型コロナウイルス感染症の影響で保育実習Ⅰの施設実習について学内演習で実施したが（石田 2022）、2020 年度は他大学においても学内演習について試行錯誤のなか実施していたことがうかがえる。

たとえば、藤原・宮下（2021）は、学内演習を①施設職員による講演、②支援技術に関する演習、③体験活動の3分野から構成して実施し、「満足度においては、『施設職員による講演』が最も高く、現場の職員による体験を交えた知見が、履修学生の興味関心を強く引き付けたことが分かる」と報告している。岡本・他（2021）は、一部は学外での実習、残りを学内演習で実施し、学内演習について①事前学習としてのオンデマンド学習による課題（事前準備）、②課題をふまえた各施設からの教育内容の提供（実践的な学習）、③ふり返りのためのグループワーク・発表・課題レポート提出（省察）をプログラム化して実施した内容を報告している。そのほかにも角野・他（2021）、松居（2021）、柴田・島田（2021）は選択必修科目の保育実習Ⅲの学内演習の内容について報告している。

このようにそれぞれの学内演習の取り組みについての報告はあるが、アンケート調査などから受講生の学びについて明らかにしたものはほとんどなく、実際に学内演習が実践現場での実習における学びと同様の学びを保証できているかについて検証を積み重ねていく必要がある。

本学の前年度（2020 年度）の学内演習においては、受講生へのアンケート調査から学内演習の

¹ 帝塚山大学 教育学部 教授

充実度は非常に高く、学内演習の学びの自己評価が高いことを明らかにしたが（石田 2021）、本稿では 2021 年度においても同様の学びを保証できていたかを検証する。

2. 学内での演習の内容

1) 学内での演習の概要

2021 年度の本学の学内演習は、2022 年 2 月 28 日（月）～3 月 11 日（金）（土日除く）の 10 日間、毎日 9 時～18 時（1 時間休憩）で実施した。

本学の保育実習 I の施設実習は、例年は障害児入所施設、児童発達支援センター、障害者支援施設、指定障害福祉サービス事業所の 4 つの施設種別で実習を実施しており、障害児者福祉施設³⁾のみで実施しているのが特徴である。したがって、学内演習の内容についても障害児者福祉施設での実習の学びを前提として、表 1 に示したような内容とした。

講演では、障害児者施設等の職員に依頼し、8 施設・法人の講演を行った。まず施設職員から実践現場の話を伺ったうえで、質疑応答の時間を設けて学生からの質問に答えていただくことで内容の理解を深めた。

また、演習では、感染防止対策を徹底したうえで、設定したテーマに関するグループディスカッションを実施した。まず、DVD や講義により設定したテーマについての学習をしたうえで、事例検討やグループディスカッションを通して学びを深め、さらに全体発表を通して意見の共有を行った。

表 1 学内演習の内容

	内容
1 日目	オリエンテーション 障害者支援施設の職員の役割（演習） 障害児支援施設と学校との連携（演習）
2 日目	障害児者の権利保障・家庭支援（演習・事例検討） 障害者支援施設等の支援の実際（講演）
3 日目	発達障害の子を持つ親についての理解（演習） 障害者支援施設等の支援の実際（講演）
4 日目	発達障害の子を持つ親についての理解（演習） 障害者支援施設等の支援の実際（講演）
5 日目	障害児者の生活および施設の実態（演習）
6 日目	障害児への専門的指導法（演習） 児童発達支援等の支援の実際（講演）
7 日目	障害児者の生活の実態および支援の実際（演習） 児童発達支援等の支援の実際（講演）
8 日目	障害児者の生活の実態および支援の実際（演習） 障害児者相談支援等の支援の実際（講演）
9 日目	障害児者の家庭支援（演習・事例検討） 障害児入所施設等の支援の実際（講演）
10 日目	障害者支援施設等の支援の実際（講演） 学内演習の総括

2) 前年度から充実させた内容

学内での演習の内容は前年度（2020年度）から大きな変更はしていないが、前年度の学内演習の結果などを踏まえて、下記の2点の内容を充実させた。

第1は、事前指導の充実である。前年度は、コロナ禍で施設実習の事前指導の授業を遠隔授業で実施したが、2021年度は新型コロナウイルス感染症の感染状況が若干落ち着いていた時期であったため、事前指導の授業は対面で実施することができた。そのため、事前指導の段階からDVDなどを活用した授業やグループディスカッションを実施することで、障害児者施設の概要や利用児者の生活状況、活動状況などについて理解を深めることができるようにした。また、事前指導の授業において、講演を引き受けていただいた施設・法人の紹介を行い、ホームページの閲覧などを通じての事前学習を促した。さらに、施設職員の職業倫理などについて事前指導の授業で取り上げた。

第2は、学内演習における家庭支援の内容の充実である。前年度の学内演習では、「施設と家庭との連携のあり方」「施設と地域社会との連携のあり方」の平均点が実践現場での実習と比較して大幅に高いことが明らかになった（石田 2022）。そこで、その特徴をより強化するために、DVDを活用した演習である「発達障害の子を持つ親についての理解」を2回組み入れるとともに、学内演習の前半から家庭支援の内容を組み入れた。その代わりに前年度の学内演習の前半に組み込んでいた「障害者支援施設の職員の役割」の内容については、一部を事前指導の授業に組み入れることで、学内演習の内容から減らした。

3. 学内演習による学び

1) アンケート調査の概要

①調査対象

2021年度に学内演習を履修した93名を対象に実施した。

②調査方法

10日間の学内演習の最終日に、学内演習の自分自身の学びを振り返って振り返りアンケートへの回答を求めた。アンケートは、本学のe-learningシステムであるTALES（Tezukayama Active Learning Education Square）を通してインターネット上で実施し、2021年度に学内演習を履修した93名のうち、すべての学生が回答した。

③調査項目の設定

本調査は、2020年度の本学の学内演習と同じく、石田・西村（2019）に基づき18の質問項目を設定した⁴⁾。それぞれの質問項目について、実習の自己評価を「全くできなかった」「あまりできなかった」「ややできた」「とてもできた」の4段階で測定した。

また、学内演習の充実度についても「全く充実していなかった」「あまり充実していなかった」「やや充実していた」「とても充実していた」の4段階で測定した。

④倫理的配慮

振り返りアンケートの結果については、施設実習の事前事後指導および実習内容の改善のための調査研究に使用すること、回答内容は施設実習の評価には影響しないこと、回答については統計的に処理・分析するため個々の回答が特定されることはないこと、調査研究へ使用してほしくない場合は申し出ることができることを説明したうえで回答を求めた。

2) アンケート調査の結果

①学内演習の充実度

2021年度の学内演習の充実度の充実度について表2に示した。学内演習全体の充実度は、「とても充実していた」が91.4%、「やや充実していた」が7.5%となっており、ほとんどの学生にとって学内演習が充実した内容になっていたことが明らかになった。

内容別の充実度をみると、施設職員の講演は「とても充実していた」が74.2%、「やや充実していた」24.7%、動画を活用した演習は「とても充実していた」が78.5%、「やや充実していた」19.4%、事例検討は「とても充実していた」が79.6%、「やや充実していた」19.4%であった。

表2 学内演習の充実度

n=93

項目	学内演習全体	施設職員の講演	動画を活用した演習	事例検討
全く充実していなかった	1.1%	1.1%	1.1%	1.1%
あまり充実していなかった	0.0%	0.0%	1.1%	0.0%
やや充実していた	7.5%	24.7%	19.4%	19.4%
とても充実していた	91.4%	74.2%	78.5%	79.6%

②学内演習の学び

2021年度の学内演習の学びについて、各項目の自己評価の結果を表3に示した。すべての項目において「ややできた」と「とてもできた」の回答を合わせると90%を超えており、学内演習の学びの自己評価が高いことが明らかになった。

表3 学内演習の学び

n=93

項目	全く できなかった	あまり できなかった	やや できた	とても できた
障害児者施設の概要	0.0%	0.0%	16.1%	83.9%
各施設の設立理念と支援の目標	0.0%	0.0%	38.7%	61.3%
施設の一日の生活の流れ	0.0%	0.0%	16.1%	83.9%
利用児者の生活状況、活動状況	0.0%	0.0%	12.9%	87.1%
施設を利用する利用児者の実態	0.0%	1.1%	12.9%	86.0%
利用児者のニーズ	0.0%	2.2%	34.4%	63.4%
支援計画の意味・施設全体の援助の実態	0.0%	0.0%	30.1%	69.9%
利用児者の特性に応じた支援計画のあり方	0.0%	0.0%	30.1%	69.9%
利用児者に対する支援方法	0.0%	0.0%	22.6%	77.4%
職員間の役割分担とチームワーク	0.0%	0.0%	23.7%	76.3%
施設と家庭との連携のあり方	0.0%	0.0%	16.1%	83.9%
施設と地域社会との連携のあり方	0.0%	0.0%	22.6%	77.4%
利用児者にとってより良い生活や関わりのあり方	0.0%	0.0%	21.5%	78.5%
利用児者の最善の利益を追求する施設全体の取り組み	0.0%	0.0%	30.1%	69.9%
施設職員の職務	0.0%	0.0%	22.6%	77.4%
施設職員の職業倫理	0.0%	0.0%	45.2%	54.8%
施設全体の安全・衛生に対する仕組みと個々の配慮	0.0%	1.1%	22.6%	76.3%
一人ひとりの利用児者に対する安全・衛生の配慮	0.0%	0.0%	19.4%	80.6%

4. 過去の学内演習および実践現場での実習における学びの比較

2021年度の学内演習の学びについて、「全くできなかった」を1点、「あまりできなかった」を2点、「ややできた」を3点、「とてもできた」を4点として算出した各項目の平均値を表4に示した。また、石田（2022）より同様に算出した前年度（2020年度）の学内演習の学びの自己評価の平均値、および石田・西村（2019）より実践現場での実習における学びの自己評価の平均値を併せて表4に示した。

表4 学内演習と実践現場での実習における学びの比較

項目	2021 学内演習	2020 学内演習	現場実習
障害児者施設の概要	3.84	3.69	3.52
各施設の設立理念と支援の目標	3.61	3.37	3.39
施設の一日の生活の流れ	3.84	3.73	3.94
利用児者の生活状況、活動状況	3.87	3.70	3.67
施設を利用する利用児者の実態	3.85	3.63	3.17
利用児者のニーズ	3.61	3.53	3.38
支援計画の意味・施設全体の援助の実態	3.70	3.57	3.29
利用児者の特性に応じた支援計画のあり方	3.70	3.58	3.36
利用児者に対する支援方法	3.77	3.70	3.54
職員間の役割分担とチームワーク	3.76	3.73	3.35
施設と家庭との連携のあり方	3.84	3.71	3.03
施設と地域社会との連携のあり方	3.77	3.59	2.83
利用児者にとってより良い生活や関わりのあり方	3.78	3.68	3.43
利用児者の最善の利益を追求する施設全体の取り組み	3.70	3.52	3.36
施設職員の職務	3.77	3.58	3.49
施設職員の職業倫理	3.55	3.23	2.91
施設全体の安全・衛生に対する仕組みと個々の配慮	3.75	3.57	3.48
一人ひとりの利用児者に対する安全・衛生の配慮	3.81	3.71	3.53

注) 2020年度の値は石田（2022）より、現場実習の値は石田・西村（2019）より作成。

1) 過去の学内演習における学びの比較

2021年度の学内演習の学びでは、「利用児者の生活状況、活動状況」が3.87で最も高く、次いで「施設を利用する利用児者の実態」が3.85、「障害児者施設の概要」「施設の一日の生活の流れ」「施設と家庭との連携のあり方」がともに3.84であった。

前年度の学内演習における学びと比較すると、すべての項目において前年度の自己評価の平均値を上回った。とくに「施設職員の職業倫理」「各施設の設立理念と支援の目標」「施設を利用する利用児者の実態」については、前年度の自己評価の平均を大きく上回った。これは、事前指導を充実させて、施設職員の職業倫理を知識として学んだこと、講演を引き受けていただいた施設・法人のホームページを閲覧するなどして学習していたこと、DVDなどにより障害児者施設の概要や利用児者の生活状況、活動状況などについて理解を深めていたことが大きな要因となっ

ていると考えられる。

2) 実践現場での実習における学びとの比較

まず、2021年度の学内演習と実践現場での実習における学びを比較すると、「施設の一日の生活の流れ」については実践現場での実習が上回ったが、その他の項目については学内演習が上回った。とくに「施設と地域社会との連携のあり方」「施設と家庭との連携のあり方」が実践現場での実習と比較して大幅に高いことが明らかになった。

実践現場での実習では、10日間という短い実習期間で家庭や地域社会との連携の学びを深めることは難しいが、学内演習では講演において家庭や地域社会との連携の事例が紹介されたり、演習において家庭支援の事例検討を行ったりしたことで、家庭や地域社会との連携のあり方について理解が深まったと考えられる(石田 2022:37)。さらに、2021年度の学内演習では、家庭支援の内容を充実させたことで前年度よりもさらに高くなったと考えられる。

5. おわりに

本稿では、受講生へのアンケート調査から 2021年度の学内演習による学生の学びについてまとめ、前年度と同様の学びを保証できていたかを検証した。その結果、2021年度においても学内演習の充実度は非常に高く、学内演習の内容を充実させたことで各項目においては前年度よりも学びの自己評価が高いことが明らかになり、前年度と同様の学びを保証できたと考えられる。

また、実践現場での実習における学びとの比較においても、ほとんどの項目で実践現場での実習の学びの自己評価を上回り、とくに「施設と地域社会との連携のあり方」「施設と家庭との連携のあり方」については実践現場よりも学びを深めることができたことが明らかになった。

石田(2022)でも指摘しているように、実際に利用児・者と関わっているか否かはという点は大きな違いであり、単純に同様な学びができたとは言えないが、2021年度の学内演習においても実践現場での実習と同様の学びをある程度は保証できたと考えられる。

注

- 1) 保育士養成課程の保育実習は、必修科目である「保育実習Ⅰ」(実習・4単位:保育所実習2単位・施設実習2単位)と、選択必修科目としていずれかを選択する「保育実習Ⅱ」(実習・2単位:保育所実習)、「保育実習Ⅲ」(実習・2単位:保育所以外の施設実習)が設定されている。
- 2) 厚生労働省子ども家庭局保育課は、2020年3月2日に事務連絡「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について」を示した。この中で、保育実習については「養成施設にあっては、新型コロナウイルス感染症の影響により実習施設の受け入れの中止等により、実習施設の確保が困難である場合には、年度をまたいで実習を行って差し支えないこと。なお、これらの方法によってもなお実習施設の代替が困難である場合、実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないこと」とされ、各養成校に適宜対応することになった。2021年度についても、2021年5月19日に事務連絡「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について」が示され、「今年度においても新型コロナウイルス感染症の影響により実習施設の確保が困難であることが想定されることから、基本的には同様の対応」とするとされた。厚生労働省子ども家庭局保育課からの2021年6月15日付け事務連絡「新型コロナウイルス感

感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について」では「実習の受け入れ先の状況によって、一部の学生は実習可能でそれ以外の学生は中止となった場合に、当該実習はすべて中止として、履修する学生全員に同じように授業を提供することは差し支えないか」との問いに対して「差し支えない」との回答が示されている。本学では、2020年度同様一部の实習施設から実習の受け入れができないとの連絡があったため、厚生労働省の事務連絡を踏まえて2021年度に予定していた保育実習Ⅰの施設実習は、すべての実習を中止として学内演習を実施することとした。

- 3) 本稿では、障害児入所施設、児童発達支援センター、障害者支援施設、指定障害福祉サービス事業所の4つの施設種別をまとめて「障害児者福祉施設」と表記する。
- 4) 石田・西村(2019)では、本学の施設実習Aの実習のねらいと内容に基づき21の質問項目を設定しているが、今回は、実践現場での実習を行っていないことから「利用児者と積極的に関わること」「利用児者とコミュニケーションをとること」「利用児者の個別性に配慮した支援を行うこと」の3項目は調査項目から外して18項目とした。

引用文献

- 藤原映久・宮下裕一(2021)「保育士養成課程における学内での演習・実習の試み—コロナ禍における保育実習Ⅰ(施設)の代替として—」『島根県立大学・島根県立大学短期大学部教職センター年報』2, 97-104.
- 石田慎二(2022)「保育士養成課程におけるコロナ禍の施設実習の取り組み」『帝塚山大学 教育学部紀要』3, 33-38.
- 石田慎二・西村真実(2019)「保育士養成課程における施設実習の現状と課題」『帝塚山大学現代生活学部紀要』15, 71-78.
- 角野雅彦・関山均・西谷憲明・福島豪・上谷裕子・古村溝(2021)「2020(令和2)年度保育実習Ⅱ及び保育実習Ⅲ学内実習の取り組みについて」『福祉社会学部論集』鹿児島国際大学福祉社会学部, 40(1), 25-36.
- 松居紀久子(2021)「コロナ禍での保育実習(学内実習)の実践報告—障害者の生活支援を取り入れた取り組み—」『富山短期大学紀要』57, 106-116.
- 岡本晴美・西村いづみ・光盛友美(2021)「新型コロナウイルス禍における学内保育実習の試み—児童福祉施設との協同—」『広島国際大学医療福祉学科紀要』16・17(合併), 73-94.
- 柴田長生・島田香(2021)「新型コロナウイルス蔓延下における保育実習Ⅲ—バーチャル施設実習の試み—」『臨床心理学部研究報告』13, 101-113.